

## 堺・仙台“すずめ踊り”交流

# 踊ることは生きること —堺すずめ踊りへの期待—

関西大学人間健康学部  
准教授 原田純子



堺すずめ踊り 関西大学第4回堺キャンパス祭 光景

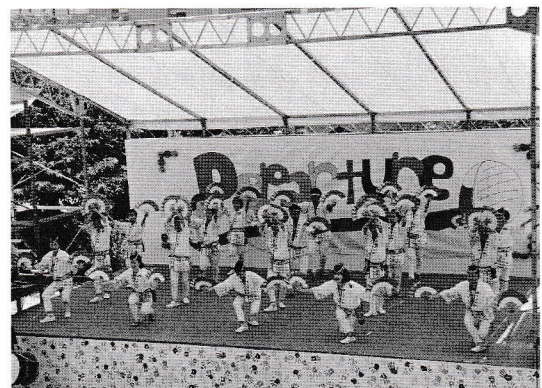
今年、二〇一四年は堺に、仙臺すずめ踊りが招聘・紹介されて十年目の記念すべき年だと聞きました。ダンス（舞踊）を通して人間形成をテーマに実践と研究を重ねている私ですが、恥ずかしながら、すずめ踊りのことは存じあげませんでした。二〇一三年に、この先十年、堺すずめ踊りをどのように普及すべきかという相談を受けて、初めて「すずめ踊り」という歴史ある踊りを教えていただきました。聞けば、仙台・青葉まつり（五月）や堺まつり（十月）をはじめとして、様々な祭りやイベントに積極的に参加し、幼稚園や小学校にも出掛けて普及活動などもされているとのこと。今から約四百年前（慶長八年（一六〇三））の青葉城築城の祝いの席で、伊達政宗公の御前で堺の石工たちが踊ったとされるすずめ踊りが、今この堺の地で伝承されていると考えると、雄大な時間の流れの中に息づ

く歴史のロマンを感じずにはいられません。一六〇三年といえば、家康が徳川幕府を開いた年です。徳川家対豊臣家という東西の緊張が高まる中、庶民の間には現世主義的な風潮が広まり、今を楽しく生きることと熱心であったという時代です。宗教的な念仏踊りや可憐なややこ踊り、仮装の盆踊りともいわれる風流踊りなどが隆盛する中、出雲阿国が「かぶき踊」をもつて京でデビューしたのもこの年です。このような時代、人々が踊る目的は何だったのでしょうか。

歴史学者・アンチオーブは、「ほとんどすべての人間社会の生活のなかにダンスが一定の位置を占めているという、ダンスの普遍的特性を示す事例は数多い。（中略）人間は単独あるいは集団で、悲喜感情を表現し、恐怖や説明のつかない事象を鎮め、疲れを振り払って力を回復するために踊り、またそれによつていま置かれている現実を乗り越えたり、他者との対話、コミュニケーションをはかるのである（p.163）」（\*）と述べています。ダンスとは本来、他者に対する表現であると同時に自己の存在を確認する行為であり、人々を結び、絆を強めるものです。

政宗公の御前で「即興的に」踊ったと伝えられている堺の石工たちも、踊ることには抵抗がなかったのだと想像します。しかも、その踊る姿が、「餌をついばむ雀」のように見えたというのですから、踊りの形式もある程度整っていたのかもしれません。彼らは踊ることに慣れ親しみ、日常のなかで踊っていた踊りを披露したということなのでしょう。このように、踊ることは生活の一部であり身近な行為でした。娯楽が増えた現代では、踊りはかつてほど必要不可欠なものという認識はなくなりましたが、本質的な意味は変わっていないと考えます。

幼稚園から中学校まででダンスが必修化された



堺すずめ踊り 関西大学第4回堺キャンパス祭 光景

今、踊りに期待されているのは、リズムに乗って踊る楽しさとともに、仲間とコミュニケーションをはかりながらひとつのものを創り上げていく面白さや達成感を味わうことだと私は考えています。仲間と意見をぶついたり、互いを尊重したりしながら踊りを仕上げていく過程は、とくに対面コミュニケーションが苦手な自己肯定感が低いといわれている若い世代にとつて、大変貴重な経験です。

踊りがもつこのような意義をあらためて認識しつつ、堺の市民文化として、すずめ踊りも是非さまざまな場所に出掛けていただき、人と人々を結び、生きる歓びや自己の存在を確かめるといふ踊り本来の役割を担って欲しいと思います。踊りを踊ることや教えることは世代を超えたコミュニケーションです。まずは、若い学生たちとの交流をということで、六月八日の「堺キャンパス祭」（大学祭）にお招きいたしました。すずめ踊りの伝統と、踊ることの本質的な意味が、皆様の踊りを通して若い世代に、そして地域の人々に伝わることを願っております。

引用・参考文献…

（\*）アンチオーブ、『ニグロ・ダンス・抵抗 十七〜十九世紀カリブ海地域奴隷制史』（二〇〇一）／郡司正勝「踊りの美学」（一九九二）